

私はそのころからある計画を立てていて、二十歳になったら実行しようと思っていた。それは、

「戦争の犠牲と親の愛情に恵まれなかった二重の苦しみに、雁字搦めになっていた自分を、自由に解放したい」という計画であった。これまでに私は、親に対しての経済的な協力を何年もやってきた。私は本当に自由になって、親のような不安定な家庭造りではなく、真から信頼し合える人と出会い、安定した家庭を築きたい。何でも話し合え、慰め合える素直な人生を送りたい、との願望がとても強くなった。そして、個人の幸せを根底から覆す戦争が起こらないよう、努力する人生を歩みたいと痛切に思い始めたのである。

## 離れて遠き 満州・虎林

大阪府 榮 武

### 一 満州へ渡るまで

私は鹿児島県大島郡名瀬町出身の父と、山形県最上郡舟形村出身の母との間に、昭和六（一九三一）年九月五日、大阪市港区において長男として生を受けた。父、文義は榮家の長男、母、ナミエは斉藤家の長女であった。

父は大阪市電気局の職員であったが、昭和十六年十二月八日太平洋戦争が始まり、緒戦の勝利はあったものの、やがて諸物資の欠乏が著しくなった。特に都市部においては食糧品が目に見えてひっ迫し、店頭の商品は次々と姿を消していった。

当時、私たちが住んでいたのは、港区八条通りの大阪電気局の職員公舎であった。道路をはさんだ向かい側には、市電の運転手の教習所があり、塀の中には線路も引き込まれていた。

家族構成は両親、私、妹一人、第二人の六人であった。私は大阪市立築港南尋常高等小学校の五年生になっていた。父は休日などを利用しては、近郊の農家まで食糧品の調達に出かけるのが常となっていた。食糧不足の印象は、いまだに煉瓦程の大きさの餅を食べたい、サイダーのプールで、これを飲みながら泳いでみたいなどの願望を持っていたことでも思い出し得る。

そんな状況の中で、昭和十七年、一家を挙げて満州に移住する農工開拓団の募集があり、父は応募を決意し、大阪府下の私市キサイチという所にあつた訓練所で、渡満のための準備教育を受けた。農工の意味は、家族は農業に従事し、主人は軍属として部隊に勤務するという形の開拓団を指していた。

## 二 出発から虎林まで

昭和十七年の夏休み中に、我々は家族揃って大阪を発つことになった。上の弟文也は、父の妹に子がいなかったため、港区に住んでいた叔母清子に預けられた。母方の兄弟も福島区に住んでいた。

が、我々の満州行きには反対を唱えることもなかった。

出発は汽車で大阪駅からだった。農工開拓団として編成された、ほかの家族たちも一緒だった。我々兄弟は汽車に乗るのは生まれて初めてで、向かい合つて座る座席も珍しく、その上に板を渡して足を伸ばせてくつろげるようにし、網棚の上に乗せてみるなど、大はしゃぎだった。車中泊したかどうかの記憶はないが下車したのは下関で、ここでは旅館で一泊した。旅館に泊まるのも初めてだったので、迷路のように入り組んだ廊下をあちこちと走り回って遊んでいた。翌日の夜は、関釜連絡船の船室で過ごした。我々のいる広間とは違って、船内には造花の桜を入り口に飾って、奥には障子のはまった特別な和室などもあり、同じ船の中にも全くの別世界があるのだという印象を受けた。夢心地であちこちを見て回った。

初めての船旅であったが、幸い誰も船酔いに襲われることもなく、翌朝無事に釜山港に着いた。

ここでは、港からある程度行軍した所であった、大浴場のような場所で休憩した。ドーム状の丸天井や周囲の壁が貝殻の裏のような白い虹色のタイルで貼られ、キラキラと輝いていたのが強く印象に残っている。

夕方には再び汽車に乗った。日本の客席より、ゆったりと大きい鉄製の客車だった。何とも言えない異臭がした。特にトイレはひどかった。車中で眠りから覚めた時、母親から「朝鮮のおばさんが可愛い、可愛いとお前の頭を撫でていったよ」と言われたことが記憶にある。

長い長い汽車の旅で次に下車したのは、夜遅く到着した清津の街であった。煉瓦造りのがっしりした建物の内部で泊まったと思う。翌日は豆満江を渡って満州国の凶們に入った。日本の統治下にあった当時は、国境といっても何の緊張感もなく、違う国に入ったという意識も実感もなく、ただ鉄橋を渡ったという感じだけが残っている。

鉄道での長い旅は、それからもずっと続いた。

同じように変化の乏しい車窓の風景にも飽き、現地の人と交流することもなく、最終目的地東安省虎林県虎林に着いたのは、日本を発って何日目だったろうか？ どんよりと曇った空の下、やれやれやと着いたという気持ちの子供心にもしたものである。下車して駅前広場に集合した開拓団員の家族たちは、それぞれ手荷物を持って軍から差し向けられたトラックに乗って、これからの住居となる農工開拓団の宿舎に到着した。

### 三 虎林での生活

父は、満州第八十部隊藤田隊という自動車部隊に配属された。共に入植した人たちは、煉瓦焼小屋の廃屋があつた小高い丘を隔てて、二つの集落に分かれ住んだ。我々は鉄道線路や街に近い方の宿舎だった。内地からの郵便物は「満州国東安省虎林県虎林農工開拓団第一宿舎」で届いた。住居は二戸一棟の土壁造りで、暖房は煮炊き用のストーブの熱が床下に回るようにした、いわゆるオンドル式の物であり、満鉄の社宅や校舎にあつた

ペチカではなかった。粗末ながら、窓は一応二重になっていた。

電気はもちろん無く、明かりはランプの生活で、ホヤ磨きは子供たちの日課だった。水汲みは集落の中央辺りにあった井戸からで、冬は回りが凍って危険なので、現地人の若人に頼んでいた。井戸の近くに小さな共同浴場があり、一応板壁で仕切られた男女別の浴槽があり、輪番で沸かして利用していた。

家族が従事する建前となっていた農業の方は、どれくらい土地を与えられていたのか定かではないが、父の休日に馬車を借りて遠くの畑へ大豆、ジャガイモ、トウモロコシなどの収穫を手伝いに行った記憶はある。家の裏には瓜類を植えていた。米作はできなかつたが、米に不自由はしなかつた。時を経て、馬一頭、豚複数、鶏数羽を飼うようになり、一応農家の趣も整うようになった。

九月の二学期から、私たちは小学校から名称の変わった虎林在満国民学校の各学年に割り当てら

れて学ぶことになった。平屋建ての煉瓦造りの校舎で教室があり、数人の教員がいて学年複式の授業だった。学校には我々と共に来た農工開拓団員の子弟のほか、満鉄職員や官吏の子弟、他に商売人などの一般邦人の子弟などがいた。街にあった物として記憶に残っているのは神社、映画館、本屋、軍慰安所などである。二階建ての建築物はほとんど無かつた。特別な買い物には、ひと駅西南の宝東駅にあった軍の酒保まで半日がかりで歩いて行った。そこには実に色々な品物があり、華やかな雰囲気で見心地で展示品に見入っていたことを思い出す。線路を挟んだ向こう側には飛行場があり、格納庫の前に高翼単葉機がとまっていたのも覚えている。

宿舎の西の方角には完達山脈があり、東遙かにはムーリン河が流れていた。道を東に向かうと高い丘があり、そこは現地人の墓地であつた。カラフルな棺桶や土饅頭の墓があり、棺からのぞく遺体は狼に食い荒されていて不気味だった。その

先には小川が流れ、しばらく行くと溜池のような沼があり、淡水性の黒い大きな殻の貝が採れた。

魚釣りはそんな小川で、水泳はその沼でそれぞれ覚えた。ムーリン河は堤防などは無い大河で、水勢によって河岸の形も変わる荒々しい風情で、大きなナマズなどが採れるようだった。

父の勤め先であった部隊の構内にも、二度程行った憶えがある。一度は部隊の慰安演芸会を見に行って、時代劇で本物の軍刀が使われていて妙に感心した。今一度は学校からの勤労奉仕で、兵舎に泊まり麻の皮むきをした時である。夜中トイレに立つと、ウトウトしていた衛兵が私を上官とも思ったのか、直立不動の姿勢を取ったのをおかしく思い出す。

戦況が悪化するにつれ、現地人墓地の近くに駐屯していた高射砲部隊が、我が家の横の道を通って虎林駅から南方戦線へと転出して行った。満州国南部も米軍の空襲を受けたという話が伝わるころには、我々開拓団も部隊と共に牡丹江方面へ移

るとかで、なけなしの家財道具を梱包して送り出していた。この間に、郵便の宛先も東安省が東満総省となり、部隊名も二六三九部隊日下部隊と変わった。

#### 四 避難行のはじまり

家の裏に植えていたまくわ瓜の一つがようやく食べごろに色付いた昭和二十年八月九日、在満の一定年齢以上の日本人なら、決して忘れることのできないこの日、私の家の周りでも明け方から人々がざわめいていた。近所の人たちだけではなく、軍刀の柄を握った将校も混じっていて、「ソ連が攻めてきたらしい」「家族は避難させるらしい」などと興奮した声が聞こえた。明るくなり始めたころ、部隊から避難用のトラックが回され、貴重品と持てるだけの身の回り品を持った女、子供たちはこれに乗って虎林駅に向かった。駅には既に乗り込んだ。父親たちはそれを見届けたあと、トラックで走り去って行った。

私は進行方向に向かって右側の座席に座っていたが、ほどなく一機のソ連機が飛来し銃撃してきたので、首を縮めてうずくまった。その時この客車の装甲では、機関砲だったらひとたまりもないだろうなどと考えていた。窓外では何人かの満軍兵士が小銃を空に向けて構えているのを見たが、これが満軍の見納めとなった。後続を待っていた列車はやがて動き始めたが、車内は混雑するには至っていないかった。列車は止まることもなく西南へ走り続け、窓外には将校を先頭に行軍している小隊規模の日本兵が列車と同方向に行軍している姿、またあちこちで火の手が上がっているのが見えた。

陽が落ちて辺りが暗くなったころ、列車が初めて停車した。駅名を見ると「林口」だった。ここでは着剣した相当数の日本兵が乗り込んだ。ここガチャガチャと装備の触れ合う音や、指揮官の殺気立った怒声がとんでいた。夜遅くになって、やっと牡丹江の駅に到着した。灯火管制下の街を少

し歩いて、魚屋か八百屋の展示台のような広い板敷の場所での夜を明かした。それでもまだ明日は先に送ってあった荷物を取りに行くのだろうなどと、呑気に考えながら眠ってしまった。

翌朝は、どこに寄ることもなく牡丹江の駅に直行した。プラットフォームはかなりの人々で混雑しており、軍人の外に木銃を持った国民服姿の人たちが、戦闘帽をかぶって座り込んでいた。我々は、駅構内の線路を横切って、待機していた有蓋貨車に乗り込んだ。乗って程なくソ連機数機の空襲があり、機影からバラバラと黒い物の落下するのが見えた。大きな破裂音が辺りに響いて、貨車の周りにいた人々が大騒ぎで貨車の下に潜り込んできた。やがて貨車は動き始めた。貨車の中程にブリキの四角い缶が置かれており、今後用便はここで済ませるようにと引率の男性から指示があった。その後、走る貨車の隙間から「横道河子」「一面坡」などの駅名を見た。夜中に列車が大きくUターンしたが、後にそこがハルビンだったことを

知った。十日の夜は車中で過ごした。十一日の昼、列車は「五常」の駅で横並びになった他の数多くの列車共々、動かなくなつた。日暮れ近くにやつと動き出し、深夜に到着したのは「蛟河」の駅だった。私たちは駅構内の低い階段の横で仮眠した。

翌十二日の朝、我々の団体は一団となつて街中を通り、映画館か芝居小屋のような二階建ての建物にたどり着いた。そこまでの道中、私は二、三人の同年輩の少年と共に三八式歩兵銃を持たされて、列の先頭を行くように指示された。その後、二、三日はここに滞在した。人々は観覧席にそれぞれ陣取つて、館外に寄つて来る物売りの満人から食糧品などを購入するなどして日を過ごした。この間に、同じく虎林から避難してきた村瀬のおばあさんが発狂して、四六時中大声で「私の息子を返してください！ 私の息子を返してください」と連呼し始めた。そのうち、どこからともなく日本が負けたという噂が伝わり、我々もこの芝居小屋を引き払つて、日本人小学校だと思われる

大きな平屋建ての教室が二、三ある場所へ移動したが、この時には、もう三八式歩兵銃はどこともなく姿を消していた。教室には、つい先日まで授業の行われていた名残りがあつた。夜、校庭の鉄棒にもたれながら、これから一体どうなるのだろうと、星空を眺めていたことを思い出す。まだ切羽詰まつた悲壮感や絶望感を覚えることはなかつた。

やがてソ連軍がこの街に進駐して来るとどんな目に遭うかもしれないということで、我々の団体もこの街を離れて、西の方にある拉法という村の方を目指すこととなつた。蛟河の街角に、粗末ないでたちの全身薄汚れたソ連兵が交通整理のように立ち始めた頃、我々は彼らと入れ違いに僅かな荷物を持つて、ひたすら西へ西へと歩き出した。一行には牡丹江やこの街からの避難者も混ざつて、誰が引率者なのかも分からなかつたが、どんより曇つた夕方から始まつた行軍は、その夜、満州では珍しい雨に見舞われ、ズブ濡れになりながら

黙々と歩き続けた。深夜、日本人開拓団の村落とおぼしき所で分宿したが、のみや蚊に食われ、糞尿の匂いに悩まされながらも、ともかく我々は草わらの中で一夜を過ごした。

その後、もう日付も場所もよく分からなかったが、「新站」辺りの小高い丘の上にあった日本人小学校で、混成の日本人避難民一行は各教室に分宿した。ここでは急ごしらえのかまどで、ご婦人たちが炊き出しでおむすびを作ってくれた。米飯のおにぎりは、この時以来帰国するまで口にする事は無かったので印象深い。この学校でも女性を狙うソ連兵の噂が立ち始め、一行はここから離れて新站だろうと思われる駅で有蓋貨車に乗せられた。どこへ行くかも分からぬまま、停車中の夜半、あちこちの車輛から大きな叫び声の連鎖が起こり、全員何か音の出る物を叩いて騒ぐように、口々に伝えられてきた。ソ連兵が車中の若い女性を狙って連行しようとした事への対応だった。一応騒ぎが治まったあとでは、これからは男女別に分けら

れてどこかへ移送されるという噂がしきりだった。後にその列車はどうやら新京（長春）に行ったらしい事を知った。しかし母はその夜の噂を恐れてか、団体を離れて単独行動を選び、「拉法」へ戻るという行動を取った。夕暮れ時に拉法駅の近くまで来たが、もちろん泊まる場所の当ても無く、駅の北側にあった山を目指して歩き、山すその野原で避難開始以来初めての野宿をする事となった。

翌日は家族五人で山を分け登り、雨露をしのぐ場所を探し、ちよつとした岩陰に少し穴を掘って、二回目の野宿をした。女、子供などが必死で高い所まで登ったつもりだったが、翌朝頭上から二人の大人が呼びかける声で目を覚ました。満人の男性だった。後に拉法の日本人に聞いたところでは、夜中に山腹で明かりが見えたので、地元の人が偵察に出て我々を見つけたとの事だった。この二人の満人男性の案内で下山した私たち家族は、開拓団の事務所兼倉庫のような煉瓦造りの空家で、その後長い間暮らす事となった。名前も顔も覚えて



いないこの二人の現地人こそ、今にして思えば我々の生存を大きく助けた恩人というべきだと感じている。

事務所には水道とトイレがあり、倉庫には山のように南瓜が積まれていた。その必要が無かったのか、村にはソ連軍の進駐は無く、現地の人たちはおとなしかったので、我々家族は怯えたり飢えたりすることもなく、何とか平穩に過ごす事ができた。それでも夜、現地の人たちの家の窓に赤いカーテン越しに明かりがつのを見ると、ああこれが普通の人の生活なんだなあ、と改めて思った。また夕陽が山の端に沈むのを見ると、一体いつ故国に帰る日がくるのかと、センチメンタルな思いに駆られ、暗たんとする日も少なくなかった。生活のため、秋には現地の人の農作業を手伝うべく遠い畑にも出掛けたが、その時渡った河の水の冷たさに、しみじみと時の移ろいを感じたものである。

そのうちに、村落に残っていた日本人は全員否

応無しに移動させられることとなり、皆、なけなしの荷物をまとめて、学校らしき所に集められ、やがて無蓋貨車に乗せられた。一人の知人も親しい人もいない団体と共に乗った列車はガラガラで、走り出すと風の寒さに皆縮まって、側壁にもたれて隠れるようにしていたが、私は寒さと戦いながら周りの様子を観察するため、時々首を出して目を凝らしていた。夜どこにも停まらず走り続けた列車は、明け方の水色が増してきたころ、両側の家並みが混み始め、だんだんと大きな都会に近づいているのが分かってきた。やがて新京駅のプラットフォームが左側に見えてきて、朝方全員ここで下車した。

##### 五 新京での生活

その後、誰の誘導でどこをどう通って到着したのか全く記憶が無いまま、我々は学校の広い講堂のコンクリートの床に、家族単位で座り込んでいた。周りには多くの人々が出入りしており、小さい子を連れた母親に、満人たちが子供を手放さな

いかと持ちかけているようだった。ここでの私の記憶は、避難行以来初めて、満州で生まれた一歳半の弟「五郎」を抱いてお守りをした事である。

講堂の隅にあった黒光りする金属性の胸像に、よく見せてやろうと弟の顔を近づけると、ひどく怯えて顔を背けたのが印象に残っている。今一つ忘れられない心痛む記憶は、しばらくしてこの学校から引き揚げるまでの住居となった宮下住宅へ移動するまでの道すがらの事である。興安大路を歩いて興安橋へ至る街路で、満人がカラフルな手まり模様の飴玉を売っていた。私を手を引いて歩いてきた四歳五カ月になったばかりの弟「秀人」が裸足で歩きながら、それをじつと見つめていた。

「欲しい」などと一言も口に出さなかったけれど、三カ月近い異常な避難行で疲れ果てた惨めな姿の弟の心の中を思うと、今これを書いていても涙が止まらない、本当に可哀相だった。合掌……。

興安橋を渡って、新京中学校を越えてすぐの、興安大路の南側にあった宮下住宅の二階建ての建

物の階上にあつた一室には、虎林からの避難民で、それぞれ家族と離れ離れになっていた熊谷君の母親と、南部勇・美佐子の兄妹の三人が住んでおり、私たち家族五人が加わって合計八人で住むこととなった。この部屋に着いて間もなく、十一月十日夜、弟「秀人」が四年五カ月余りの短い生涯を閉じた。二日後の十一月十二日朝、弟「五郎」が一年七カ月の命を、日本人でありながら日本の土を踏む事も無く、音も無く息を引き取った。二人共気が付いたら息をしていないという状態で、それはそれは静かに亡くなっていった。医者などいようはずもなく死因も不明なまま、呆気なく相次いでこの世を去ってしまった。

二人の死後、深く悲しむ余裕もないまま、私は相次いで弟たちの亡骸を背負って、競馬場といわれた辺りにあつた日本人避難民の埋葬場に、家族三人で行き、穴を掘って土葬した。当時はそうするのが当たり前前の状況であつて、特に違和感は無かつた。

三家族八人の住人が、すぐに六人になってしまったけれど、皆それぞれに厳しい冬に備えなければならなかった。水道とトイレがあったので、どれだけ助かったことか。しかし電気と燃料は無く、ペチカと風呂もありながら使えなかった。夜にはありったけの衣類を集めて、身体を寄せ合って寒さをしのいだ。

新京での主な生計維持は、私が石炭やコークスなどを拾い集めて、満人に売る事で現金を得ていた。満鉄の機関車庫、貯炭場の近くにガラ捨て場があり、一日中そのガラ山の中から石炭のかけらやコークスを探し集めて、南京袋の中に入れ、ある程度たまったら買い集めにきている満人に竿計りで計ってもらい、売っていた。燃料を集めながらも商品は自家消費する余裕などなく、自分たちの煮炊き用には無人となった日本人住宅の窓枠などをはがし集めては、これに充てた。貯炭場までのび込んで、黒光りする大きな石炭の固まりをかすめてくる勇者もいたが、見付かると公安隊の

銃の台尻で殴られていた。あまり深くガラ山を掘り進めたために、穴が崩れて生き埋めになる者もいた。興安橋から貯炭場の鉄路沿いにも石炭が落ちていた。よくこの間を往復した。時折通りかかる機関車から、留用された満鉄社員が我々の姿を哀れに思っ、小さなスコップでわざと石炭を落としてくれた。顔を覚える暇など無かったが、生活を助けられた邦人として挙げべきであろう。

春がきて暖かくなると、使役に出ることが収入源となった。新京駅北東の「寛城子」辺りの農家に雑役に出た時は、飲料水は大きなカメに入っており、水を飲むためにはヒシヤクでその縁をトントンとたたいてボウフラを沈め、その間にすくって飲むという経験をした。国府空軍の飛行場でも何度か軽労働に従事した。仕事のあと、炊事場の大きな平たい釜の底の雑穀のおこげがもらえるのが大変有難かった。明確な記憶はないが、このようにして得た現金で安い食べ物を購入して

何とか食いつなぎ、それ程の飢えを感じたことはなかった。粘りのある餅粟を炊いた食事は特にごちそうだった。宮下住宅の中でも、食べ物を持つて炊いていて少し目を離れた間に、七輪ごと持っていかけた話や、ごめんくださいの声に玄關へ出てみると、靴が無かった話など、日本人同士の生きるための軽犯罪は枚挙に遑<sup>いとま</sup>がなかったが、生きていくためにはボンヤリしている方が悪いくらいの感覚で聞いていた。

しかし同じ日本人の間でも、新京に到着した時期や状況により、その生活状態には雲泥の差があった。邦人はすべて家を追われた避難民だと思っていたが、現実には新京に元から住み続けていた人たちは格別であった。商売など生活の基盤があり、医者<sup>いしや</sup>の存在も知り、さらに学校教育まで受けていたということを後に知り、驚きを隠せなかったが、人それぞれの環境と運命があり、こうして生きて祖国の土を踏めただけでも良しとせねばなるまい。

昭和二十一年五月二十日ごろまで、新京は八路軍の統治下にあったと何かの記述で見たことがあるが、多分まだ彼らが残っていたある晴れた日の昼、宮下住宅の我々の部屋の扉をたたいて、突然父が現れた。恐らく再会の望みは無いだろうと思っていた我々家族は、狂喜する前にまず呆気にとられた。にわかには信じ難かったが、間違いなく父だった。その時どんな言葉を交わしたか記憶はないが、翌日からは父と一緒に心強い限りだった。虎林で私たちと別れたあと、部隊と行動を共にした父は、敗戦で武装解除を受けて、徒歩でソ連国内に向かう途中、国境を越えると逃亡が困難になると判断し、満州国内にいるうちに仮病を使って入院に成功。そこから脱走する途中に銃で手の甲を撃たれ負傷したが、これを目撃した八路軍の兵士がなぜかかくまってくれたため、その後は八路軍の中で自動車整備などの仕事をしていった。しかし家族への思いを断ちがたく、そこをも離脱していろいろと消息をたどり、流れ流れて新京に到達。

ここで日本人居留民会からこの場所を聞き出した  
とのことであった。そんなわけで他の仲間たちの  
消息も分からず、同室者の手前我々だけが、父が  
帰ったことを手放しで喜ぶ事はできなかった。

八路軍は、私の知る限り、質素で規律正しく悪  
事を働かぬ立派な軍隊だったが、父の話聞いて、  
より好感を覚えるようになった。

父が最初に手掛けたのは、二人の弟の遺体を掘  
り出して火葬することだった。燃料などは、どう  
調達したのか覚えていないが、私は家族全員と共  
に、昨年弟たちを土葬した場所に父を案内した。  
春先まで土が凍っていたためか、遺体はほとんど  
そのまま、父もその姿を確認し、薪を組んでそ  
の上に遺体を載せ、長時間かけて茶毘に付した。  
遺体からこぼれ落ちる油で、ジュースジュースと  
いう音と共に青い炎が上がったことを良く憶えて  
いる。

#### 六 引揚げ開始から帰国まで

いったん新京を制圧した八路軍が、国府の新編

第四軍に押されて撤退した後、避難民の帰国が開  
始された。夢にも思わなかった事が現実化したの  
である。しかも我々には生還した父までが加わっ  
て！

暦などが無かったので月日は不詳であるが、  
我々は居留民会の指示に従って、身の回りの荷物  
を持って背の高い給水塔が印象に残る南新京の駅  
に集合し、多くの日本人と共に側板の低い無蓋車  
に乗って帰国への途に就いた。何とか生き抜くこ  
とのできた新京での思い出をあとに残して。

汽車はゆつくりと、時々長時間駅でもない所に  
停車したりしながら一路南下し、奉天に到着した  
あとは、今度は西進して凌河を渡り、錦県で初め  
て下車した。ここでは破壊されて床がほとんど抜  
け落ちた三々四階建ての廢ビルで何日かを過ごし  
た。街には独特の景觀の塔があった。錦県を出発  
して到着した葫蘆島コトウは、本当に何も無い線路だけ  
が地を這っているような感じの所だった。駅から  
棧橋まで長い列を作って歩き、埠頭では長時間待

って検査を受けた。刃物類は鉄のたぐいでも提出を要請された。何年かぶりに見る海は青く広がっていた。埠頭には、米国のリバティ型の貨物船と、舷側に日の丸を描いた砲塔に砲の無い日本海軍の駆逐艦が停泊していた。私は乗船定員も少なそうな駆逐艦の方に乗りたいと思っていたが、我々家族は貨物船の船底の方へ行かされた。場所が決まったあと、私はデッキに上がった。たくさんの人が、船べりから離れ行く満州の大地を眺めていた。恐らくは皆それぞれの思いを込めて……。私は船首の方に行き、舳先に肘をかけて下の海を見つめた。大きなクラゲが数多く白波の左右を遊泳していた。

船内の食事は一食に十数個の乾パンだけだった。食べ盛りの年ごろには本当にこたえた。一年近い避難行の中で最も飢えに悩まされ、船員たちはどんな食事をしているのだろうか、のぞいて見たい気になった。

渤海から黄海を経て祖国日本までは、おおよそ

四日の航程だとあとに本で読んだが、何日か掛かって到着した舞鶴では、船内にコレラが発生したとかで上陸できず、再び山陰の山影を見ながら佐世保に回航、ここでもすぐには上陸できず、かなりの間港内で待機、そのうちに盆がきて船上での盆踊りが開催された。結局日本の島影を目にしてから、その土を踏むまでには相当な時日を費やした。それでもやがて上陸の日がきて、佐世保の施設ではDDTの洗礼で迎えられた。引揚げに伴う諸手続きを経て、ここでは長逗留することもなく、南風崎から汽車に乗った。大阪駅に着いたのは九月の中旬だったと思う。この駅を出発してから、既に四年の月日が経っていた。

#### 七 引き揚げてから

引揚げ後は、福島区大開町の母のすぐ下の妹の嫁ぎ先の家にしばらく居候をさせてもらった。この間に、南海大地震を体験した。その後は港区の千舟橋の市電の停留所近辺の、全くの焼野原の一角に掘立小屋を建てて、家族四人で住んだ。この

間に、父は職探しの傍らブローカーのようなことをして何とか生計の維持を計った。私も、市内の焼け残った所にあつた黒田塗装店や浮島屋看板店などに勤めて、家計を助けていた。

そのうちに父は大阪市港湾局に操機手として採用され、妹も局の診療所で看護婦の見習いとして働き、生活も何とか安定してきた。

私と妹はそれぞれ働きながら夜間の高等学校を卒業、そのあとは育英会の奨学金を受けながら、神戸大学と大阪大学を卒業することができた。家の方も港区内の焼け跡で、掘立小屋からバラック、そして人家が軒を連ね始めたころには、何とか壁塗りの二階建てへと転々と移り住んだ。

昭和三十三年、私は中学校教員から高等学校の教員へ移るのを機に、縁を得て結婚し家元を離れた。ほどなく妹も縁を得て結婚し、実家を離れた。

中学校で三年、高等学校で三年の教職を経たあと、昭和三十六年、私は大阪証券取引所に勤めることになった。三十四年間取引所に勤務し、平成四(一

九九二)年、無事定年退職することができた。

この間、昭和二十四年に弟が一人生まれしたが、平成二年、両親は相次いで亡くなった。子供たちをそれぞれ独立させたあとは自由気ままに過ごしていたが、病には勝てず母は三カ月、父は十一カ月の入院だった。

現在残された家族は、それぞれ家庭を持ち、子を得、孫に恵まれて平和な安定した生活を送らせて頂いている。戦中、戦後のあの緊迫と困窮の生活を思うとき、戦争が多くの人々にとっていかに無意味で不幸の元凶であるかを痛感せざるを得ない。

現在平和ボケから戦争肯定的な風潮すら生じている日本の現状を見ると、棄民経験を経験することなく語り継いで行く事は、決して無意味ではないと感じている。

百人百様の引揚げ体験の中で、私たち家族はまだまだ恵まれていたのだろう。多くの手記を読むにつけ何かに助けられてここまでこられたのだと

感謝せざるを得ない。

パソコン普及のお陰で、ヤフーの検索などを通じて、数人の引揚者のサイトにアクセスする事ができ、忘却の彼方に沈んでいた古い記憶を蘇生させることとなった。

この一文が昔虎林に住んだことのある人の目に留まって、生きている間に連絡が取れたなら、どんなにか嬉しい事だろう！

自分ではあまり人の世話になる事もなく、がむしゃらに突き進んで今日に至ったと考えていたが、日本人居留民会を組織運営された人々、引揚援護局で努力された方々など、目に見えぬいろいろな力が結集されたお陰で、今自分が生きているのだと痛感する。ありがとうございます。

## 赤い夕陽の満州

島根県 中原 祥晴

はじめに

私が生まれたのは、島根県松江市から日本海沿いに約八十キロメートル西にある仁摩町です。町は北側が日本海で、三方山に囲まれています。町東の山が有名な石見銀山です。私はこの町の大国小学校四年生を終了したとき、大正六（一九一七）年から撫順に住んでいる祖父母の所に行きました。私の長兄は、六歳のときからこの祖父母に引き取られていました。祖父は、撫順でいろんな公職に就いて活躍していましたが、昭和十四（一九三九）年に脳溢血で倒れてからは、寝たきりになっていました。そして、終戦後の混乱がたたって昭和二十一年二月に死去、父もあとを追うように三月に病死してしまいました。

私たちは、昭和二十一年七月に日本に引き揚げ